

1983

春の 公負

いわみざわ

発行 地屯駐見岩
編集 集
司令業務室広報

月間目標
冬季安全
管理月間



年頭の辞



岩見沢駐屯地司令
1等陸佐 佐藤 榮

昨年駐屯地全隊員の努力により極めて順調に推移でき諸兄のご苦勞に対し感謝いたします。皆さんはどこで正月を迎えられましたか。故郷で家族の皆さんと久しぶりの正月を迎えた人、或いは警衛勤務、当直勤務等で正月を迎えた人等各人の感慨をもつて新年を迎え、新たな抱負を持つたことでしょう。

本年駐屯地は、開設以来三十年になり、施設は老年期に入り修繕を要する箇所も増えてきました。反面、新しい隊舎も半ばできつつあり、これが完成のあかつきには、二段ベットの解消等居住環境は著しく向上し、当駐屯地再整備は面的な年になるでしょう。第十二施設群は、満七歳になりました。本道防衛の第一線を担うため日夜精進を追求し、また戦技力を向上し戦技に勝つこと、あるいは個人の充実をはかり、自か庭を築くことが、即ち国家防衛につながることを認識して大いに努

力してほしいと思えます。駐屯地の全隊員が新年にあたり思いを新たに、新しい目標をたて、励まし協力し合い、五十八年が駐屯地にとり、各部隊にとり、個人にとり、実り多い年であるよう祈念して、年頭の所感といたします。

駐屯地のみを皆さん 明けましておめでとうございます。御家族ともども佳い正月を迎えたことと思います。雪の重みを支えて枝を張り緑を絶やさないオンコや松や杉のたくましさや雪景色に潤いと力強さを感じさせますが、これも、駐屯地司令の御指導のもと、全隊員の一致協力により推進された緑化作業の成果と感謝してまいります。



岩見沢駐屯地業務隊長
2等陸佐 大村 了

業務隊長に着任以来 五箇月を経たわけですが、業務隊長の職務は宿屋の番頭であつて、駐屯地に起居し、或いは、来隊、宿泊する外来者にいかにか喜んでもらえるサービスをするかが私の仕事です。サービスの改善向上は業務隊長の意識の問題ではあります。反面利用者たる皆さんの意識の問題でもあるわけで、その点積極的な

意見や苦情を期待していません。施設の整備のうち最も関心の高い新隊舎の工事ですが、秋頃には内装工事も完了して移転できるものと思います。現隊舎については国の緊縮財政と正面装備の充足促進のため、新隊舎並の全面改修は見込みありませんが、方面総監部と折衝して内部の整備に努めたいと思います。

近い将来の問題として、現在要望中の厚生センターの建設見通しがないことから、売店を現隊舎の一角に収容整備して売場面積を増やし、あわせて業種その他の改善も図るべく鋭意検討中であり、皆さんの智慧も借りたいと思えます。新しい年に展望を持つて進みますよう。

隊員宿舎新築工事進む



(十二月一日撮影)

二十歳の正月
第三三六施設中隊
陸士長 出村和広

一つ歳をとる毎に、新たなものを得るとともに、大切なものを失つていく。一つ歳をとる毎に、世の中の矛盾に苛まれ、一つ歳をとる毎に、人生の素晴らしさを知る歳が増す毎に、色々な悩みや苦しみが生じ、歳が増す毎に、悩みや苦しみが消えていき、そして私は二十歳になつた。時は止まることなく流れ、必然的に年齢はそれに伴い増えていく。

しかし、悩み苦しみ心の中で懸

誓い新たに

命にもがきつづけて来た割には、精神的に大人になれない。大人になれないから悩み苦しむのである。うか。結局、年齢の増加に精神面が追いついて行かないのである。この幼い私が、社会人として立派に一人立ちするため新たな決意をする時が、来たことを痛感している。

私は、昭和五十八年度の目標として、少なくとも二十歳という年齢に見合うだけの精神面の充実、心掛け、そして自衛官としても、強い身体と技を鍛えて、母の期待に応えるべく精一杯努力したいと考えている。

おはん返上なるか

出産を機会に退職する折、上司が忠告して下さつた「団地のベランダでおむつ干しに明け暮れ、井戸端会議にうつつを抜かし、新聞は三面記事しか読まぬ、そんな魅力のないカアチャンにだけはなるなよ」と。

そして、四年が過ぎ、将来を予言されたかのように、ほぼそのとおりになつた感がある。

最近、釣にスキーにと開眼した風の主人や、反抗期真盛りの息子がやけにまぶしく見えるのは、私にそれだけくすんでしまつた証拠。

さては全エネルギーを彼らに吸い取られてしまつたか。いえ、そうではあるまい。色あせてしなやかさを失つたのは私のせい。何事にも怠惰になつたのは私のひよわな意志のせい。

今年は一とつ、自分の感性を取り戻して磨きをかけて、・・・などとかツコつけて見ても作り事で終りそうなので、よそう。

とりあえず、上昇気流に乗つていられる彼らに遅れを取らぬよう、おはん返上すべく「精神的にも、肉体的にも」努力したい。

三三七施中 水口三曹夫人
水口あさみ

必勝を期して
五十七年度各種競技会の最終を飾る施設団スキー競技会が、二月三日岩見沢駐屯地において開催の運びとなりました。競技会に臨む団長の方針は、レクリエーション活動は参加することに意義があり、競技会は勝つことに意義が有る。たとえ二位であろうとも、それは負けに等しく、我々自衛官は常に必勝を追求せよと、競技会に強く述べられていきます。

駐屯各中隊は、必勝を期すべく戦技者を選定し、一丸となつて訓練に泣き、闘いに笑え」をスロガンに日々厳しいトレーニングに励んでいます。

御家族の皆様方には、土・日曜日もなく、訓練・勤務に励んでいる御主人が、家庭サーピスの面で行届になりがちですが、必勝のため、特段の御理解と御協力をお願い致します。

訓練隊長



告知板
スキー教室のご案内
駐屯地では、毎年実施している家族スキー教室を、一月十一日から十三日の三日間、駐屯地スキー場において行ないます。

御家族の方々多数御参加下さいますよう御案内申し上げます。

申込先・厚生科
申込期日・一月八日迄



やけど

ストーブを囲んで一家団らんと
いつたふん囲気は、北国の冬でし
か味わえないものです。
しかし、家庭内においてはスト
ーブに限らず、やけどの危険性が
いたる所にひそんでいます。
このやけどの救急処置について、
「知っている」とことと「できる」
ことの違いについて述べてみたい
と思います。

例えば家庭の主婦に、「やけど
の救急処置について」の回答を求
めれば「水で冷やす」と、ほぼ百
％正解であります。

しかし、これら多くの主婦は、
水道の蛇口で手を冷している場
面をイメージとして持っているもの
だと思います。

現実には、もちろん手足の温度は
多いが、家庭内のストーブ上のヤ
カンをひっくり返して肩や背中や

腰等にやけどを負うことも少なく
ありません。

「背中や腰等にやけどをしたら
」という質問には五十％の正解に
落ちてしまいます。蛇口の下に身
体が入らないからです。さらに、
やけどの救急処置を、系統的に手
順よく出来る人は、ごく少なくな
つてしまいます。

一、着衣の上からでも、すぐ水
をかけて冷やす。
二、着衣は、注意して脱がせる
か、切り取る。手足であれば、水
をくみ溜めた中につけるか、水を
注ぐ。

三、身体の広範囲をやけど（肩
背中、腰、腹等）では、濡したタ
オルやシーツ等で包み、さらに水
を注いで冷やす。

四、傷の上の異物（焼けただ着衣
等）は手をつけず、薬品類も塗ら
ずに濡したタオル等で覆う。

五、冷やし続けながら、早く医
師の診療を受ける。

以上が具体的な実技であり、救
急処置に関するレベルは、「知っ
ている」という知識と「できる」
という実技は、まったく異なるも
のであります。

北国の長い冬を、安全に過ごせ
れば、これに越した幸せはありま
せんが、しかし万一、家族等がや
けどをした場合、慌てず手順よく
救急処置が「できる」ことを願つ
て止みません。

群本部中隊衛生班長
二尉 内海幸満

検閲ごぼれ話



温厚誠実な某一士は、不眠不休
の群検閲時に歩哨を命ぜられた。
合言葉 前進・実行 を確認し
一分隊長上番しますと激刺と申
告、立哨位置へと前進した。
しばらくしてからフト注意する
と前方から、かすかに近づく人の
気配を感じ、「すわ」敵襲か又は敵
の偵察かと一瞬緊張するとともに
落ち着いた動作で静かに誰何の時
期を待った。

「止まれッ」・・・人影は止ま
つた。「誰か？」・・・「〇〇隊
長」・・・歩哨は合言葉の確認に
は距離が有り過ぎると判断し、「
前へ」と言つた。人影はゆつくり
と前進し、丁度良い間合に入つ
た。「止まれ」歩哨はハッキリと
した低い声で「前進」と言つた。

すると、〇〇隊長と名乗る者はゴ
ソゴソと歩き出した。歩哨は慌て
て大声で「止まれ」と言つて前進
を阻止させ、再び低い声で・・・
「前進」・・・と言つたら又歩き
出したので歩哨は大声でいわく、
「〇〇隊長、前進ですッ」・・・
さて、〇〇隊長と名乗る者は、ど
のように「実行」したことやら？

徒然なるままに

世の中千差万別、男女あり、黒
人、白人、黄人あり、楽しいこと
苦しいこと、金持ち、貧乏人、出
世する人しない人、テレビコマー
シャルじやないが貴女作る人私喰
う人、自分の力ではどうにもなら
ない世の中、常識では考えられな
い事象が沢山起き、まさに世の中
面白いということになる。

そんなこんなを考えると、人生
よくよく考えず、楽しく愉快に生
きる事が得のように思えてくる
しかし、如何にせん動きパチの
環境の下で育つた私達のこと、た
だ愉快に楽しく生活することは罪
悪に思えてくる。その善悪は別と
して、生れ育つた環境や習性は、
私達の生活や意志に大なり小なり
の影響を与えずには置かない。

意識の改革、固定観念の排除、
・・・そんな思いも所詮どうにもな
らないことに気付く。

ア、人生何と楽しいことか。

(和)